

弘末：それでは、続きまして、現在メディセレスクール大阪校講師でいらっしゃいます中島さんより、コメントをちょうだいしたいと思います。中島さんは青年海外協力隊の一員として、ガーナ等で活動されたご経験をお持ちです。それでは、どうぞよろしくお願いたします。

中島：どうも皆さんこんにちは私、一番今日、話聞きたかったのが西田さんと鈴木さんのお話で、タイのお話、非常に面白いなと思いました。私は専門が農村開発ということでして、阪神淡路大震災のときはアフリカにおりました。2004年のスマトラ沖のときもアフリカにおりました。何をしていたかという、村で幼稚園を建てたり、田んぼを作ったりというようなことをしていました。やっぱり、地域の人が防災にしてもどれだけコミットするか、防災なら防災とどれだけ関われるかというのが、非常に力の元になると思います。

私が言いたいのは、簡単に言いますと、石碑という先人が残したものが関西にもやはりあります(図1)。これは、紀伊半島だけを示しているのですが、四国でも昔、津波とか災害に襲われて、これをなんとか子どもに伝えたい、後世に伝えたいということで先人が残してくれたものがあります。

これを私たちは引き継いで次代に伝えていきたいということなのですが、なかなかできないことがあります。先ほど、前林さんも申し上げましたが、やっぱり過疎で、石碑は残っているけれど人がいないというような状態になっている部分もあります。私はこれをひっくりめて、東日本とか西日本とかではなくて、インドネシアとかタイではなくて、アジアというくくりで、「石碑群」としてみんなでひっくりめてみていったらいいのではないかというふうに思っております。大変今日は貴重な話を聞かせていただいて、どうも西田さんありがとうございました。以上です。

弘末：アジアで石碑群を残すことの意義について、お話いただきました。

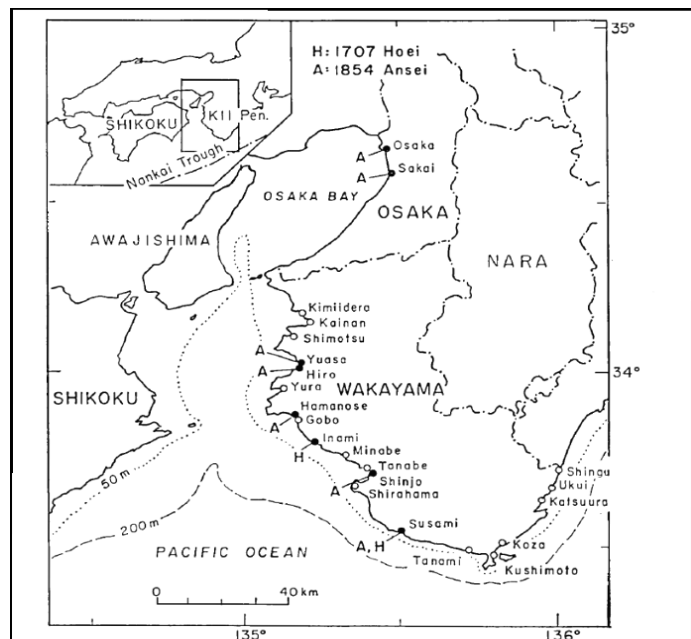


Fig. 1. Map showing the investigated fields. Closed circles show distribution of old monuments of the Nankaido tsunamis in 1707 and 1854.

### 図1 紀伊半島の津波碑

羽島徳太郎,「大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査」,地震研究所彙報, Vol.55 pp505-535, 1980より、改変を加えず転載。図中の●は津波碑の位置を示し、Hは1707年の宝永津波、Aは1854年の安政津波によるものである。